（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　　桑原　和美

本論文は、大正期から昭和戦前期を中心に活躍した舞踊家である楳茂都陸平 （本名・鷲谷陸平、1897-1986） の活動の実態とその歴史的意義について、これまで調査されることのなかった鷲谷家所蔵の未公開資料の調査、分析を通じて解明し、その全体像を捉え直す試みである。

大正期から昭和戦前期にかけて、日本舞踊と西洋舞踊との接触によって舞踊界には活発な動きが生じた。上方舞・楳茂都流の継承者としてその改革にたずさわる一方で、宝塚歌劇団や松竹歌劇団にも籍を置き、同時代の西洋のバレエやダンスの技法を積極的に取り入れた「新舞踊」などの名で呼ばれる作品を次々と発表した楳茂都は、この動きをリードする存在であったが、従来その活動や作品の姿は、断片的な情報から推測するほかなかった。楳茂都自身に由来する信頼性の高い資料の検討を通じて、その全体像をとらえることがはじめて可能になった。

本論は、序章のほか、全 3 部 9 章からなる。「新舞踊」の概念やそれにかかわる問題系を再検討する序章、楳茂都の活動の背景にある文化的な文脈を論じた第 1 部に続き、第 2 部では「新舞踊」に関わる楳茂都の活動の時系列的な展開が、新資料を駆使して具体的に辿られる。

本論文中の白眉と言えるのが、楳茂都の代表的な「新舞踊作品」である《春から秋へ》《ソナタ・アパッショナータ（熱情奏鳴曲）》《裸山の一夜》の三作品を具体的に論じている第 3 部である。この三作については、楳茂都の残した「舞踊譜」を翻刻して、そこでの具体的な動きについて著者が詳細な解説を加え、原資料の写真版と逐一対比させる形で収録した 150 ページ以上にもおよぶ別冊が付されている。これだけでも大変な資料価値であるが、本文での分析では、著者自らがこれらの作品の復元上演プロジェクトを主導した経験が随所に生かされ、伝統舞踊の素地をもつ楳茂都が群舞などの西洋的な技法をいかに受け止めてひとつの作品に昇華させていったのかということにかかわる具体的な機微が見事に炙り出されてくる。

また、楳茂都の活動を論じた第二部でも、楳茂都自身が立ち上げた「楳茂都舞踊協会」での活動記録や、欧米視察の際の当地の舞踊家との交流や当地でのデモンストレーションの仔細など、楳茂都自身の記録を通してしか知り得なかったような事実が丹念にたどられており、これまで「西洋かぶれ」の伝統舞踊家といった些か一面的なイメージに塗り込められていた楳茂都の全体像の孕んでいる奥行きや陰翳が照らし出されてくる。日本文化の近代化の諸相を考えてゆく上でも様々な示唆を与えてくれる成果といえよう。

「楳茂都内部」の資料の読解に精力を費やした結果として、「外部」との間で織りなされる相互作用などへの目配りがやや不足しているといった問題点も残されてはいるが、もたらされた成果の大きさと比較すれば大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認定するものである。